難波名所

蘆分船

大坂鑑

巻三

162
86

葦分舩第三目録

田蓑嶋
新御霊
難波御坊
津村御坊
座摩
稲荷
薬師堂　附芦間池
瓢箪町
観音堂
三津寺
阿弥陀池
道頓堀

大正
13.3.13
内交

162-86

蘆分船巻三

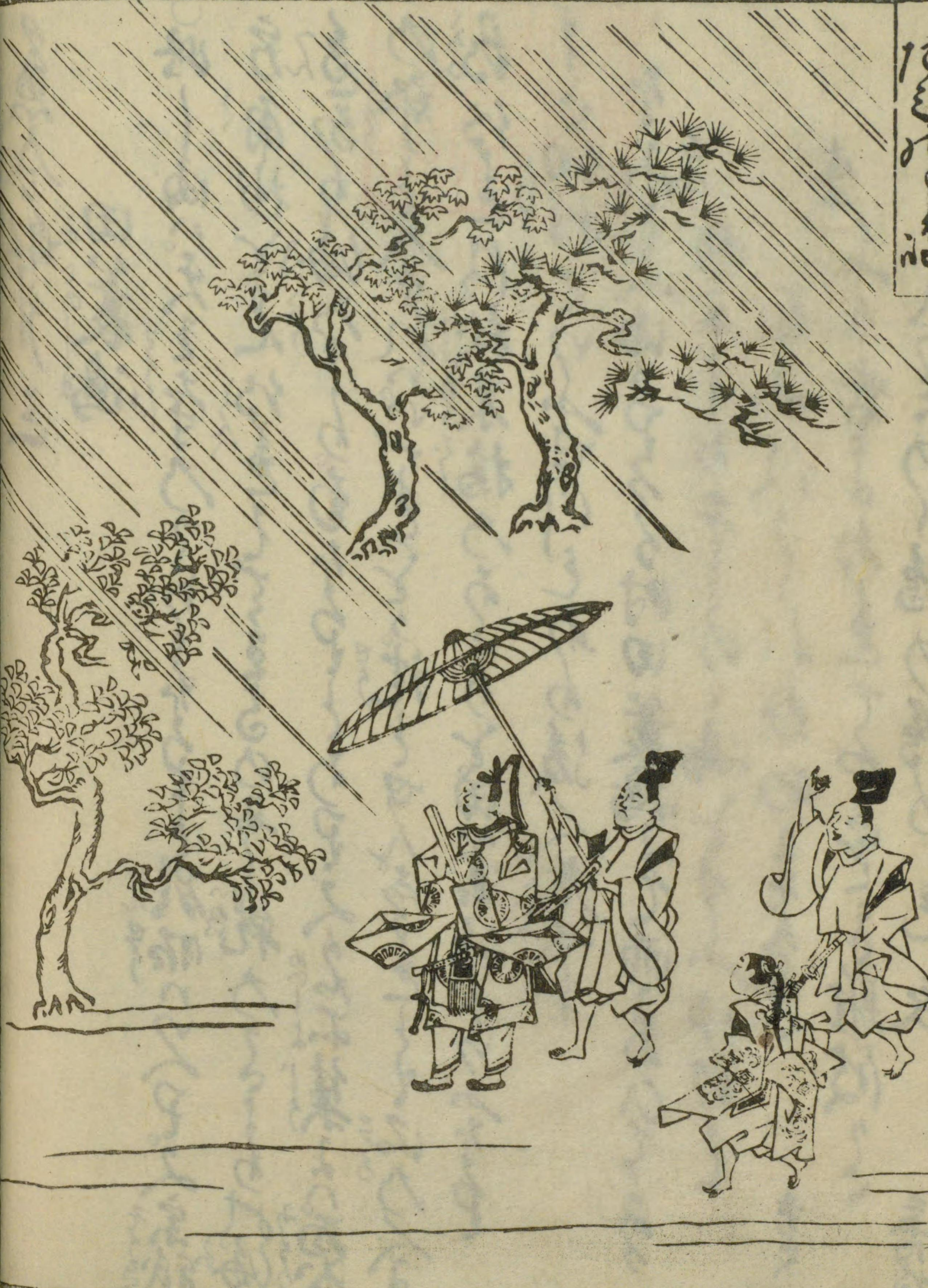
田蓑嶋

○此しまハ天王寺のこほりなりと顕昭ハいへり。又宗祇方角抄と見え縁辺にてよまるゝのみ。乾のかたよりれ海辺なり。海風よりて南なるとあり。又名所和集にハ西成の郡とあれバいづれをまことゝ説とせんずれども、所の人ハ難波江は杖木橋のあたりを田蓑嶋といふなりと。又佃村といふ所もあれバ後人考へし

なにはへまかりける時田蓑嶋にて雨にあひてよめる

古今
雨によりたみのゝ嶋をけふゆけど
名にはかくれぬものにぞありける　貫之

建保
ふる雪によはきてや寒き難波かた
たみのゝ嶋の鶴の毛衣　家隆

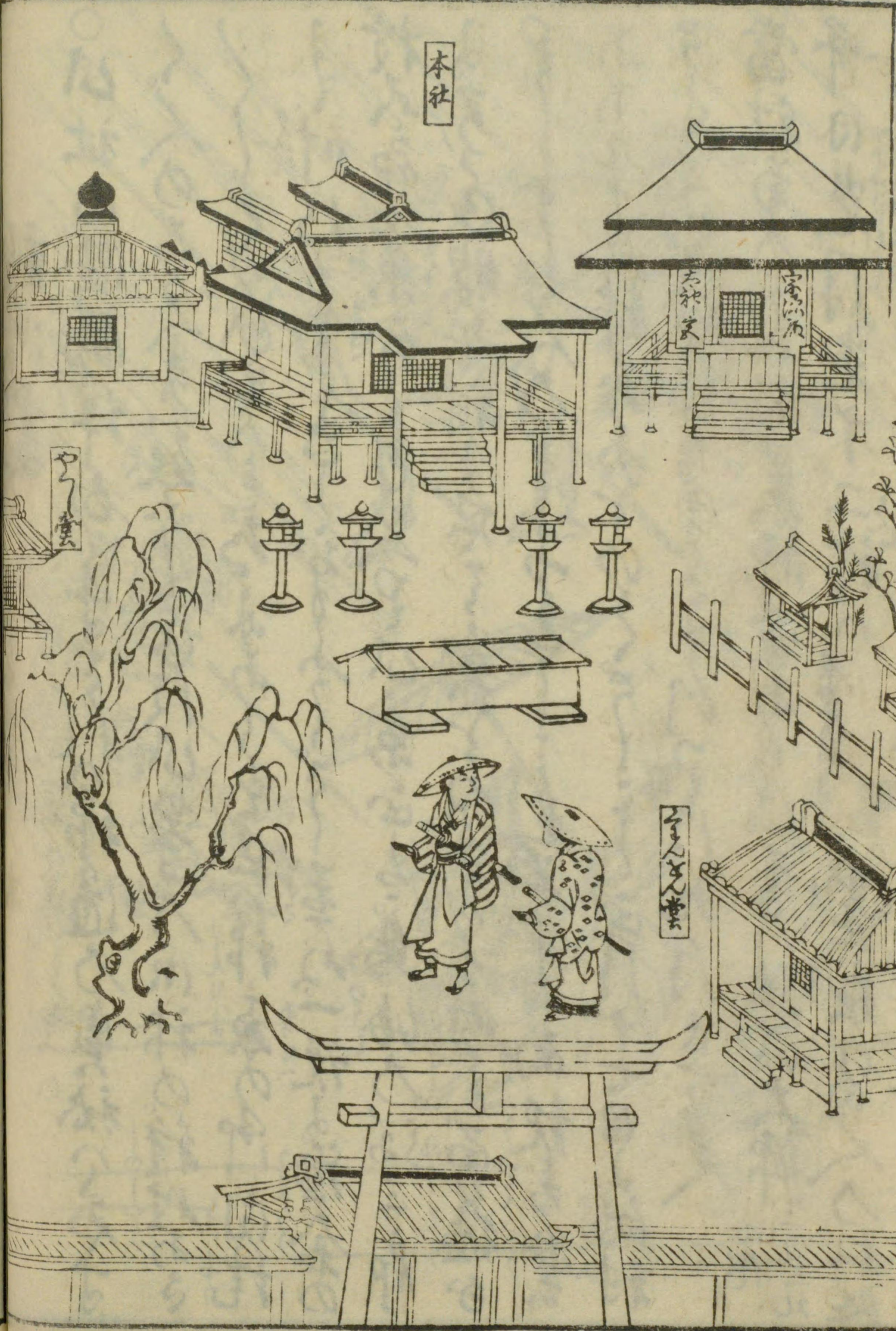


新御霊

○此社の濫觴詳ならず。されハ神道の奥秘にやすく人の知るへきにあらず。然なれ共此等の社は神の權社おほく、しくしくひ出んとたのみにあらねども臣は神慮の御内證も叶給ふましきとおぼしけれども、蓋し或一説に鎌倉の權五郎景正ともいへり。此景正は鳥海の弥三郎に弓手の眼を射させ、矢をぬかさりし時も勇猛なりしまゝ、人の誉にいひしことは也。并十一面観音堂あり。まゝ神ほとけのくだりこと、正月十七日に的射とくびうを射給ふまゝまいりくれは九月十七日也。

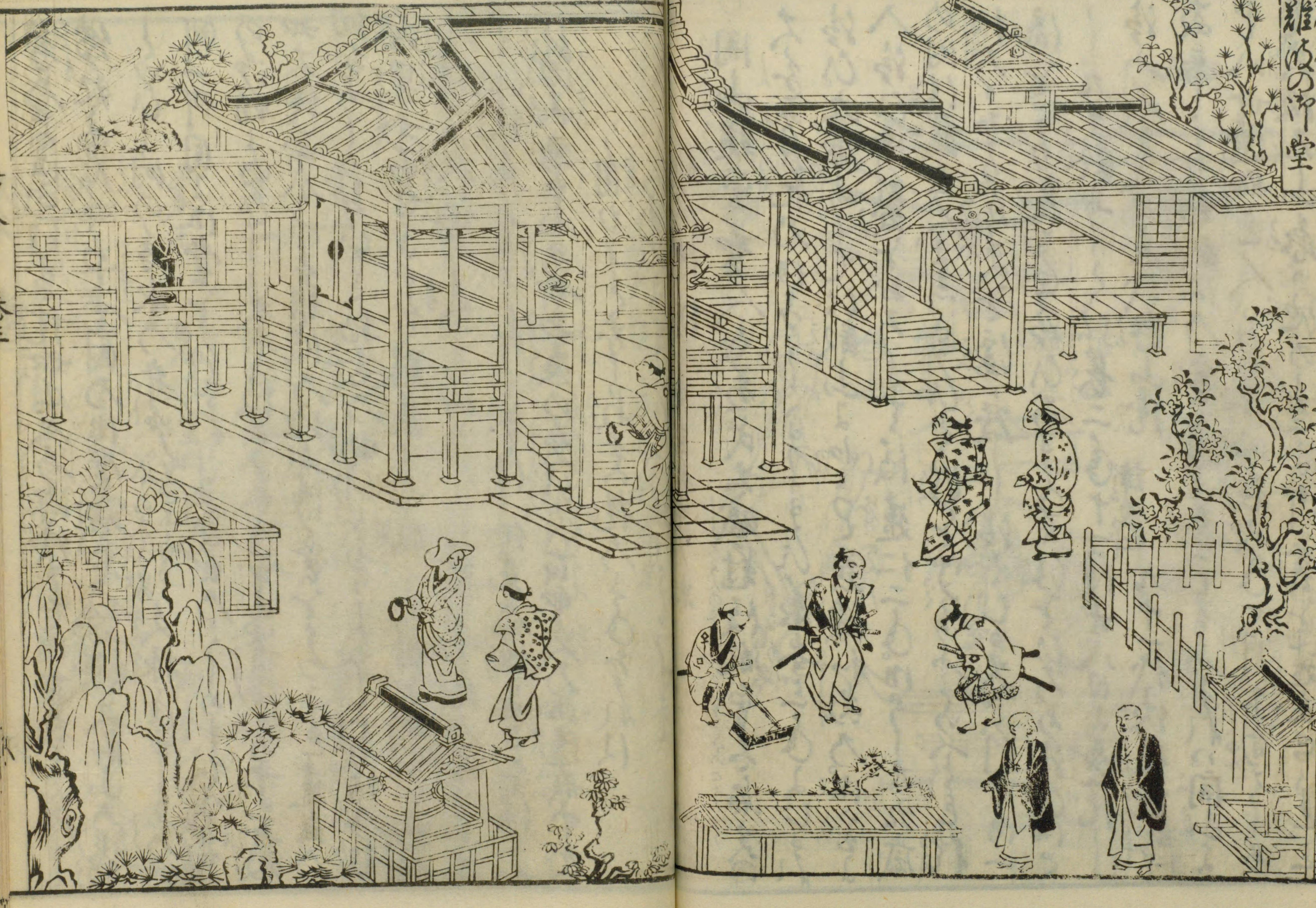
當社南のかたに薬師堂あり。此堂ハ弘法大師（一刀三礼御作）并日光月光十二神ハ（運慶作也）霊験諸人の知処也。社僧新坊清家の湯起にかんてらり

新御霊 一


本社
大神宮
やくし堂
きんせん堂

祇陀御坊　東本願寺ノ末

○開山親鸞聖人は。藤氏大織冠後胤。皇太后宮大進有範の御子にてましまし。承安三年にむまれ給ひ。九歳にして。比叡山にのぼり。慈鎮和尚の御室に入給ひ御髪をおろし。その後建仁二年。御とし廿九歳の時。法然上人にまみえ。ひろく法をさづかるといへども。猶おろかなる。凡夫を済度なし給はんが為に。別一流をとり立させ給ひ。あまねくして。法をひろめ給ひ。御とし九十歳にして。弘長二年十一月廿八日に遷化し給ふ。人王八十九代亀山院（諱恒仁）九十一代伏見院（諱煕仁）両帝より。勅願所の宣旨を蒙らせ給ふ。されば開山より第八世蓮如上人。八十二歳明応五年七月下旬はじめて。大坂石山亀が池の辺に御堂を建立せらる。三



難波（なんば）の御堂（みどう）

古への名は此地に坊舎蓮如上人の御代までは、なかりけるよし。傳記に見へて、この世ぞ時の御堂屋敷。（今の城のうちとや）又石山の御坊といひし時の手水の井戸。（今の大手口のうへに今もあり）文禄年中に御坊町一町目に御堂をうつされしのち、又去のつとめまでは御坊の御傍といひしなり。それは慶長年中、本山より十二世教如大僧正、今の難波の地に御堂をうつされ建立の初なりしよりこのかた、朝暮の勤もおこたりなく、參詣の老若男女雨夜ともいはず群集し、夥しく目を驚かす。朝の鐘は煩悩の夢をさまし、八の太鼓は無明の眠をさます。讀經の聲、世のうれしくもけし、佛恩の深きことを演され、他力眞宗は末世相應の要法として、古聖人の御遺誡にも

自力まくなしね草は櫂のこゝろなれは

彌陀のまうけし御舟にのりてさよ

津村御坊　西本願寺末

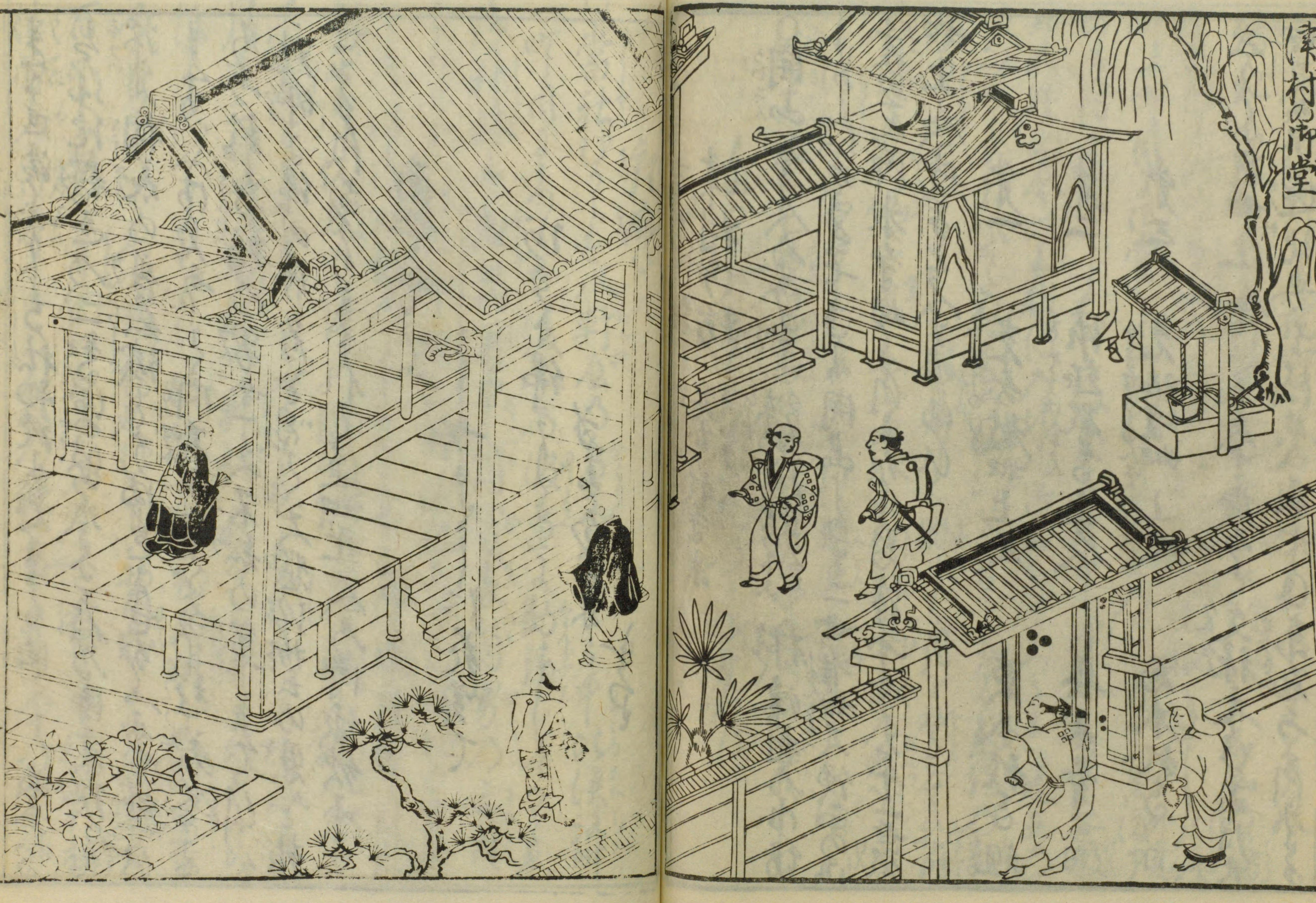
○開山聖人の御事。（東の御堂の下にくわしくしるせり）抑津村の御坊しかれは慶長七年に開山よりかぞへ十二世准如大僧正の建立也。御本寺のかたはらにならび詣給ふ。又十一世顕如上人御子三人ましませし

男一　光寿教如上人　東本願寺祖

男二　佐超顕尊上人　興正寺　同

男三　光昭准如上人　西本願寺　同

其うちに顕如上人御とし五十歳にて文禄元年霜月廿四日。御遷化也。さて慶長七年。東西に分れ給ふ


津村（つむら）の御（み）堂（どう）

まさせ給ふ。しちや社地続にありてこの傍ことに本来あり弥陀釈迦の二尊娑婆に八千度の御来現ありて浅井桐葉の善知識となり衆生をさとし給ふにや仏法ますます繁昌して門前に市をなし。老若群あふれ。参詣の男女一文不知の輩まで難外に仏の御名を唱へ大悲折伏の恩を報せざるはなかりきされば蓮如上人の御詠歌に

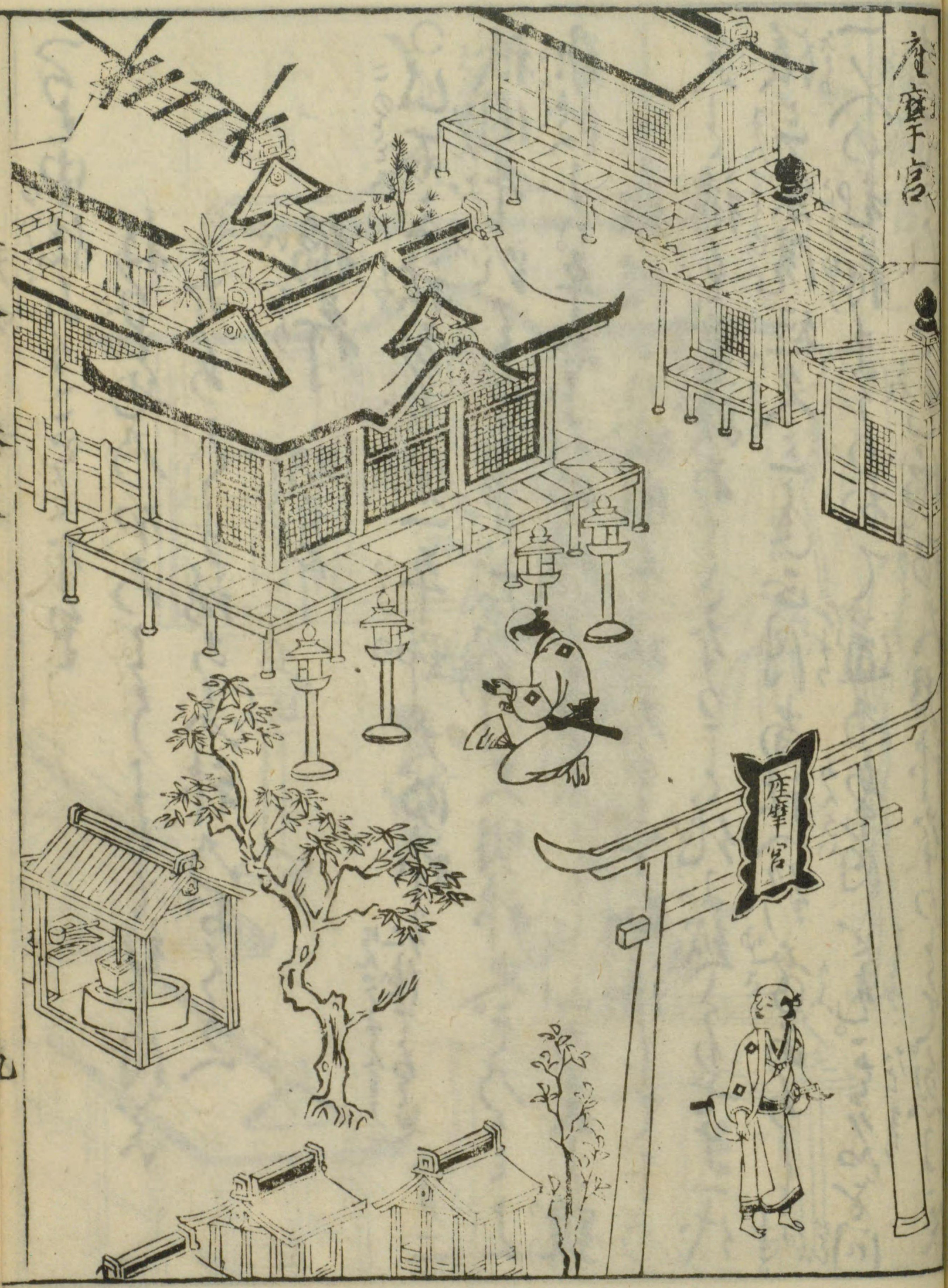
南無やふ
こちらさしに花咲て
かうし仏なり
身となるかみ
まるよ

○坐摩

当社むかしは八軒屋の邊にありし。中古淡路町一町目にうつし。其後今の渡邊に。勧請し奉る。御神躰は。底筒男。中筒男。表筒男の三神なりとぞ。神功皇后。三韓退治ありて。神功皇后十年。庚辰御凱帆のとき。こゝにしばらく御安座ありしによりて御休息し給ふ。（今は八軒屋のほとりに舊礎あり）其時に賤女来りて。菱貝をさゝげてまつりしかば。是を式として。今は六月廿二日。御祭礼の神供に捧とてまつるなる。はぐくみし人なりとぞ。綾女なる。是天探女也。則当宮乃ち今いふ小社是也。むかしは神料として。田園七百六十石を。寄附せられしより。人皇四十八代称徳帝の御願に。三韓の神ましまして

夜やさむき衣やうすきかたそぎの
ゆきあひのまより霜やおくらん

是神社乃頽毀をなげき給ふ神詠なれどもむかしは二十年ごとに禁裏より修造のやしろと成て造営ありしが此はなはだ衰へ此社もとつくりたまへりとぞ也。又六十二代村上天皇の御宇。應和二年七月大旱祈雨のために十一社へ奉幣をさゝげられし時も。當社其随一なりとかや。むかしは靈驗あらたなりしが。後乃兵火に焼失せられき。いづれの御世にかありけん。高貴德主。坐摩大明神と勅封とあそばしたる額并貞和元年正月一日より當氏子におさめ給ふ願書いまに神殿にあり。又渡邊乃氏族は門ことにあがめたてまつり。氏宮乃氏人なりとぞ傳

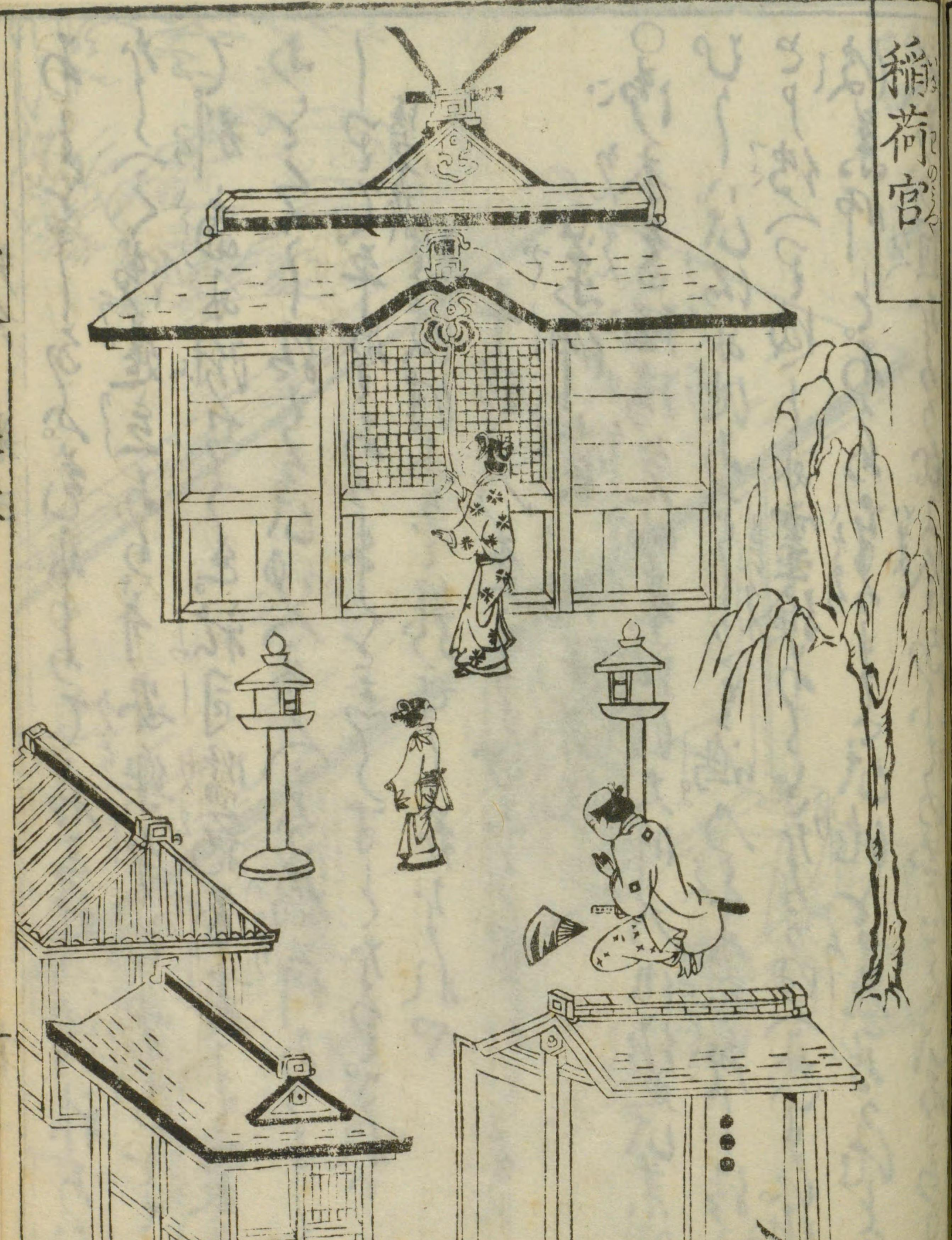


つうじ由緒（ゆいしよ）あることなるべし

祈りし花乃かゝろうよあしもむすばずば
なかくよはる神乃おそく

稲荷（いなり）　螳螂（とうろう）町

○此所（このところ）三社（しや）あり。第（だい）一平野（ひらの）大明神。（仁徳天皇也（にんとくてんわう））第二祇園牛頭（ぎおんごづ）天皇の皇子第三稲荷（いなり）大明神也。その乃ミと上號（がう）難波（なんば）よりは平野大明神と尊崇（そんそう）して。その乃文と號し。下難波よりは。祇園牛頭天皇と。勧請（くわんじやう）してぞ下乃文字と稱（しやう）す。霊験（れいげん）あらたなりし。後に越（え）へ給ひて七十一代後（ご）三条院（さんでうのゐん）。延久（えんきう）三年。正月當社へ行幸（みゆき）ありし時一人（ひとり）の老翁（らうおう）まうけて。道（みち）乃案内（あんない）とて。これに名を問給へば。是（これ）しも稲荷（いなり）大明神なりとぞ。忽（たちまち）にきこえ

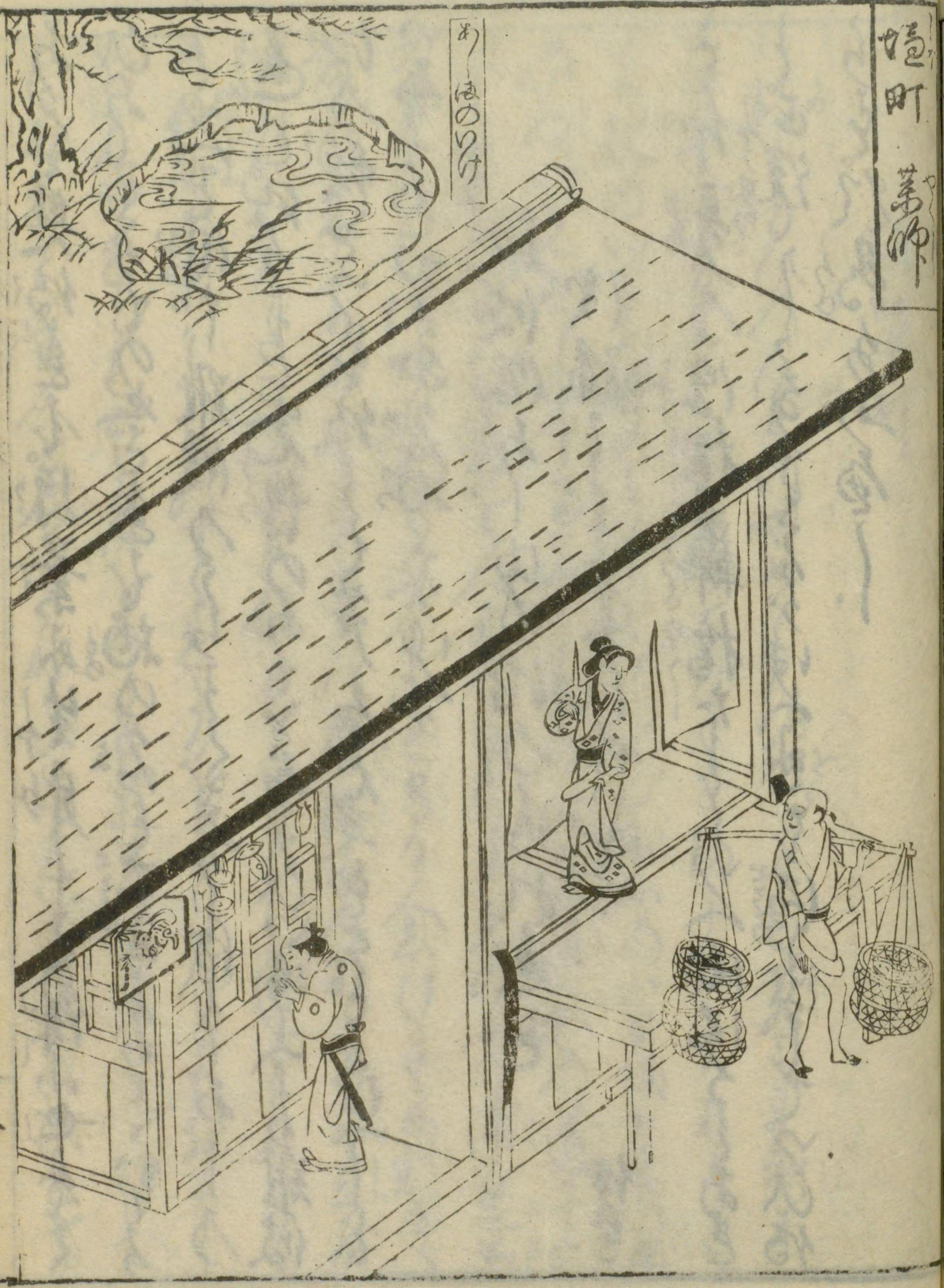

稲荷宮（いなりのみや）

あるとぞうしろに芝にあつて。右ハ社乃御神あひならべて御建立あり。并安楽寺。長楽寺とて別当に附せしむ。社司監物図書ども装束おとてし給へるハゆへに人〻ミな稲荷ありけるをしりて。平野あつまるとまうすとなるそされい

（続古今歌）
難波津に冬籠せし花なれや
平野乃松にふれるしら雪　家隆

薬師堂　附芦間池

○御本尊瑠璃光如来。弘法大師乃作也。此薬師むかしバ此所に池ありしかバ。此鴻乃島に安座し給ふと申伝へり。殊に霊験あらたなりけれバ。人〻ミ。いまに難波薬師とぞ。あがめ奉る。されバ池を芦間池と云人あり。宜なるかな。今ハ名のミのこりて芦もなくバしあらミ


塩町　薬師
あしまのいけ

あらと見侍りても言葉に生涯しく誠に世になくひあらきものゝ恋さまにて物の名も所によりてかはるといへと同し難波のうちなるさへ所によりて違も侍りしと先哲のおとゝも云ひおしへたる難波江の歎をつまを侍りても芦をたへをとゝもふむへしといふうもかくふりし名物なりけり

明玉

難波潟あしゆの波のなれ色も
深緑なりそ春はみてまし　伊勢

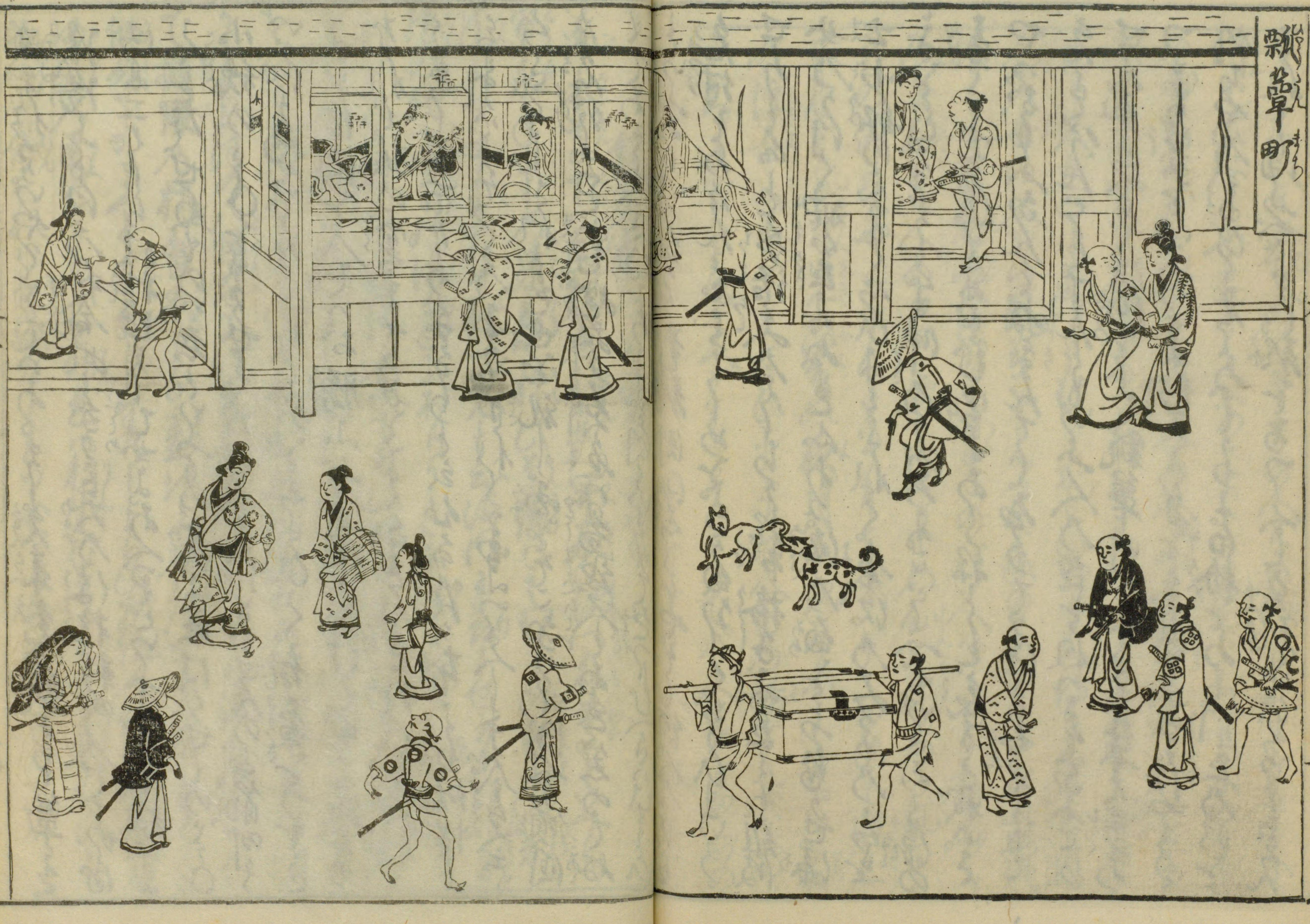
さや夢乃浮橋。轟橋たしく。人は治らしあたに衆説しりなしさらがゆへぬ。所をさしていひ侍らず。猶考ふべし

瓢箪町

○浪まくらひとのひとよ川やめてこれ問くるも業のさまを知おさめもの恩なるもかくあはなくさ悔よりひくらふあさまに親のいさめ世のそしりをもつゝむみなんのいつ悔たる物の色乃為にとおもふ常色に春の陰秋の道ゆへにしらきみにも姿を人にみせてまつとしおもの。その浦の蜑雲のうきめを流せてくふかの山を出ちる人に忘けさみに定めく亙ひまをわかちてあきらされ局格子のあゆみ立屋すらひかなしさこなくしてんとうらし目をとゝろこうしめ。遊女のみのうられずむまでとうくいんとにもおほくさしとんやもしらぬを名をとまりもあるひあれはさくつてもをあまとりて人をとめされしはい河まてと浦あい流まてとう

そしるかへつら誉（ほむ）るか人そしるか人へたゞみおめねあるなるかよふ
何（なん）ぞばたもちまをすてゝおそしさうんやされど本のそて
の風うみおしつるこゝろへも人さへ色好（いろこのみ）さん人へいどさ
うくしやつひ抱のあつまらどれよりそしるかと詠（えい）ぜ
まし人もいと延（えひ）しむうしおもひ出ま伽かやま一は。
今（いま）の世（よ）の人の風義（き）を見るふ家のゝなしもと貴賤（きせん）
俗（ぞく）としみ色好（いろごのみ）ぬむかし学（がく）このむ人へはすくなく字ゐく
衣ゝ志（こころざし）を人あまをおかむつしろ乃ん学（りんがく）やおゝ気（しき）つま
里の佛学やくすんざうすなきいゝばさくなかひし眼（まなこ）之
すん（さん）さ一寸（いっすん）先（さき）れ闇（やみ）れ我月の称（よ）なふしきもら歳（ゆめ）
乃浮世（うきよ）みあつことなひしとうそ八百乃語（て）そくゆねさ
さどうくかんさ庵さうてまつやましてゝ八文字をかきおの
ク。気（きさ）まてありぬ無めわしのくあますさとおさんへ。瓢簞町

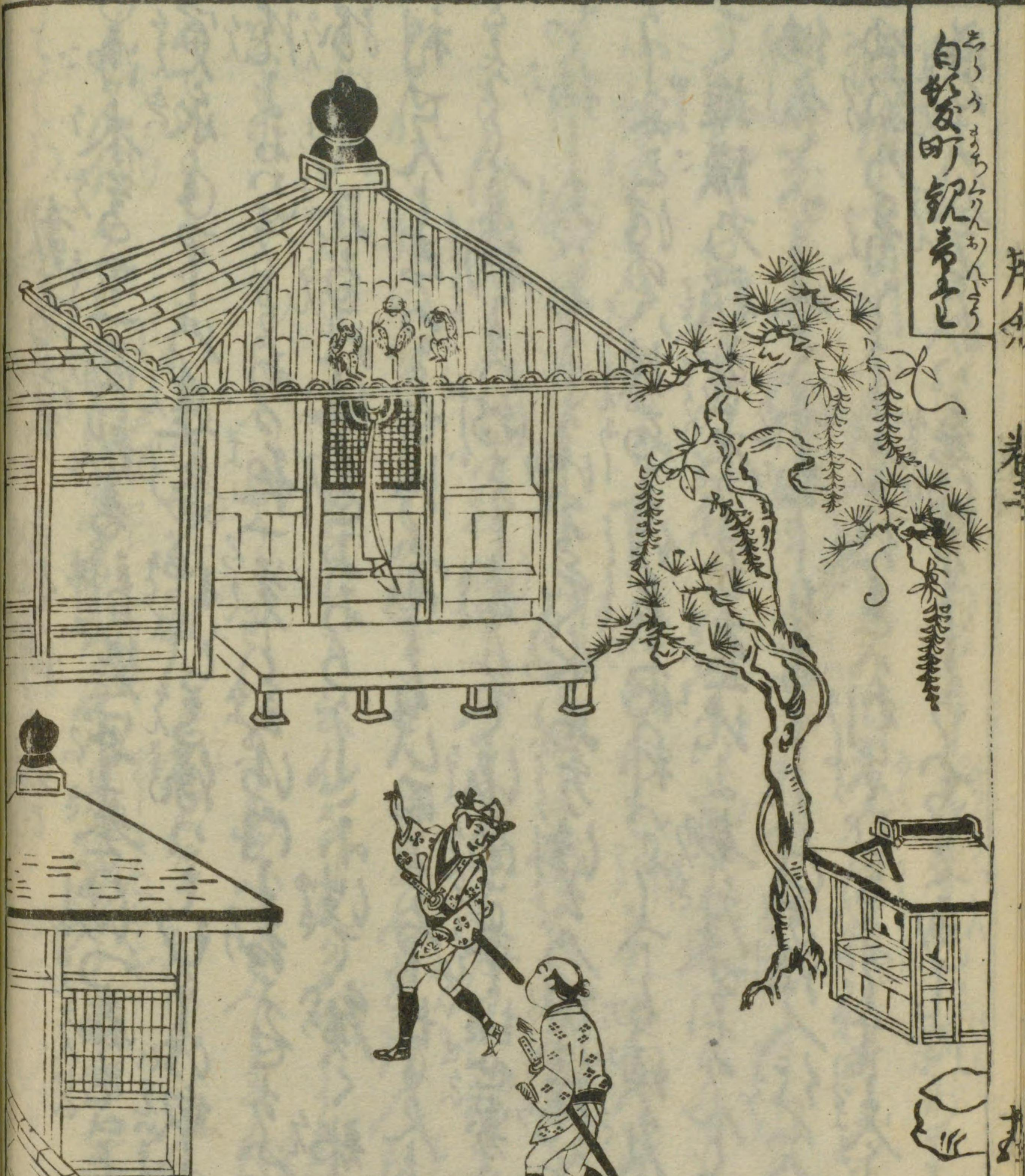
しかあらいるゝり色髪倒（とう）ばもやぞて何人ぞろくそ
名付（なづけ）そあくんとごきそしめそとさうぬりしくおすひまいう
せうしぬとぞ子語文（ちぢ）のちぢれ髪（で）格子（かうし）ふ立しれ難波
女乃うけく袖笠（そでがさ）ふ。ねきんあの渡（わたて）の面（おもて）とふ鰐（わ）の仕海
士小板（まとゐ）のこゞりてもひみえずかく。余所（よそ）のみめ乃まかゝ（うき）を
ささとそてうす。沖（とき）乃ぶろみごころへでづきまゝ浮（うき）の
暮（くれ）ふきしひしみまむ雲（ひ）まあく掛どもそ（こう）ゝ我いさ
やへおまふかんどねきんて。鳳あてうばれ松（こゝろ）てしきて
えをぞくんともすんとももふ人乃ゑきれいさそかふさう
せん帝（よ）かへらくぱ所（ところ）とて瓢簞町とゐるすへ。将せ君（おめく）あ
つまわ瞽（くこ）とゆゑつきゝみ恋（わさき）くやかとしふゝ業はやころと
いちや乃こゝろ（ろう）ひくかんてめぶうかれ白粉（おしろい）とわかに門立（かどたち）乃ほとと
ちかましゆへどそて髭（ひげ）をあつくへて。夕顔（ゆうがお）ともらくろとゐぞゑん


瓢箪町（へうたんまち）

みなれかうやくさてハあつまりし遠来是ハ瓢あり瓢箪さ。陰陽ふさ行乃和合ならバかうこゝに大乃佳橘。新町乃をしか河あ二つならむ相むまして女よおへ里につくる人会ぬ右よくもたくせぬものハ恋といふもの家よ悉はくせしのこ小歌のうたをまりせうくおけるしのにさせんの三筋にていどにより相なくなみと別とさてらいく。君喬とづきさまさを御酒を入てハお腰ふぶるもとさけく出さが瓢箪なかむ旅の空ませて身をともかまとれ里理乃契れらまりさ面をわかるわてらんむるんかむよわ。誠懐とらますハのそく乃学しがれくう果ふつさ入しまず今更らとらざくしさればも世を乱し忠をそこかりてうし人よ傾国たる名付られ。寛煌蒸子菓子也ハ曷鵲人しおまハ忠めてもておそふべきたまあくすぐ門へいまめてハつりしむべきハけしからひ

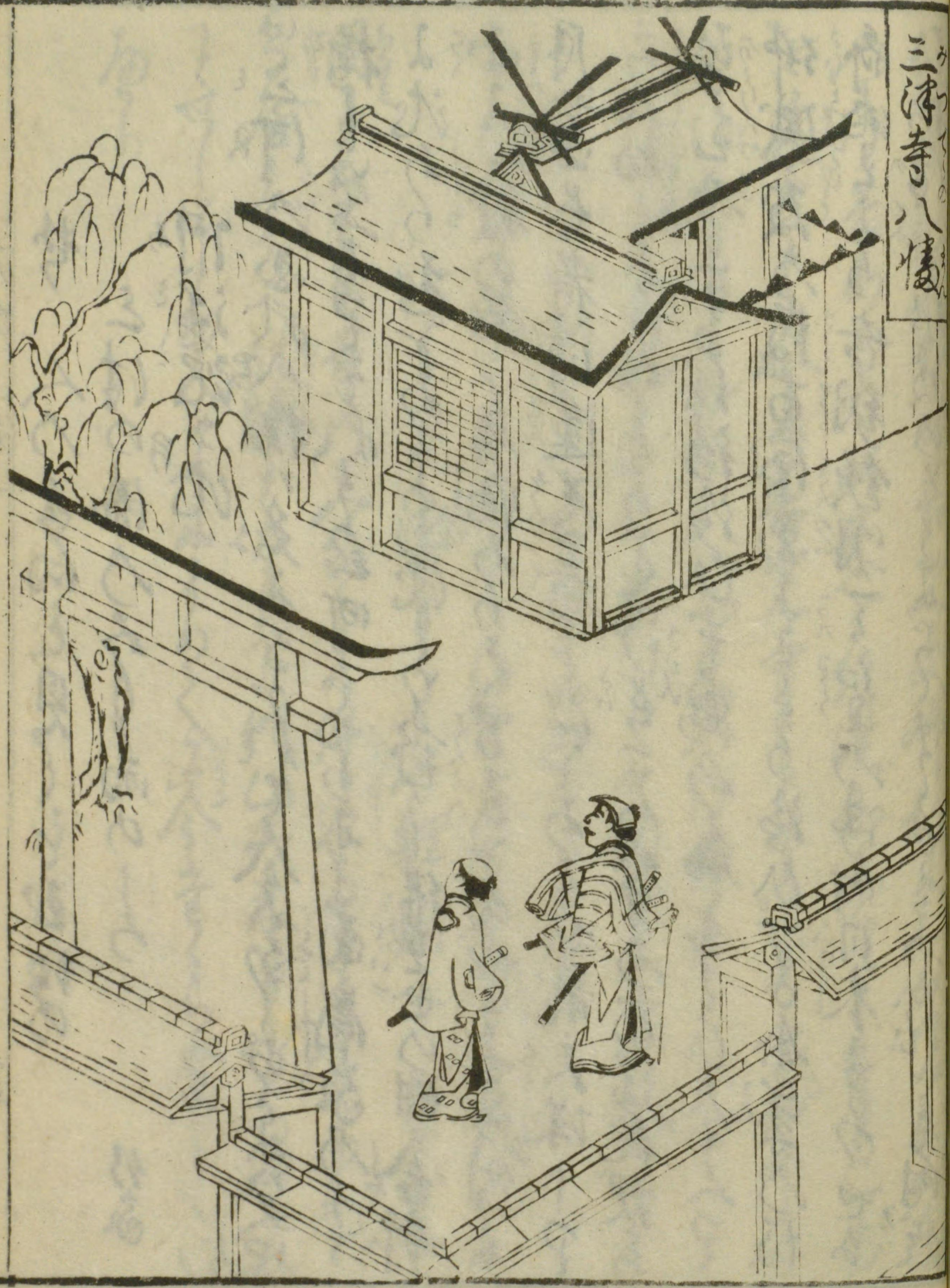
観音堂　白銀町 大福院

○御本尊十一面観音。仏工春日作也。開基ハしやうゑん上人寛永年中乃建立也。抑此観音ハむかし比叡山乃坑よおハせしが。ある夜一覚と云ぶ御門に告させ給ふハ。我縁の地。西南に海さよわりたるこの地にて。広く衆生を利せんとおもふと世徳ふかよりて此寺に安すんと地とりたる御の御にしえありて浪南方に菰世界乃荘厳と極しおハあかうへかとして水西方浄土乃功徳池とたくひうつみ三津の八幡。西よ住吉大明神ハ守りへらわ。鎮守して擁護乃精霊也りしが霊地よ安座せしめんとおもふ佛をもかまへく安置しわより此方諸人信心乃歩恒敬乃首をかたふき須生ハ利生むなしからず。今人と浴人よ会ぞれハ悉険なしといふなりとあ


白髪町欽明堂

三津寺　八幡并欽明堂

○当社は。応神天皇也。此帝御在位の時難波に行幸あり。此ほとりに。鳳輦をとゞめさせ給ふ所なりとぞ。そもそも此所を社とあがめし也。大菩薩と遷し給ふ所を拝み給を奉り給ふとかや。欽明天皇の也。しかるに此時難波にいまだ八幡宮あることをとき孝謙天皇の御宇。天平勝宝元年此地に八幡を建立せられしより也。其上鑑鑰を引くる聖武天皇よりは八幡を勧請し給ふ時。宮社御在世の間なりゆへに難波の三津よりて移し給ふ時によりて社若く同じ津ちるにも本尊菩薩乃出生の所也。又鎮座ありし其の神勅にまかせてとく寂しくすされば此所をといふ。菴乃葉れとよく残。して給ひく



新古今　[illegible]れくる志ほ路の浪のいつまでか　浮世の中にうかびわたらん

其後(そのゝち)[illegible]勧請(かんじよ)[illegible]以て今[illegible]霊験(れいけん)あらたなり。三津の浦[illegible]三津寺(てら)[illegible]

[illegible]いざりにまつを光(ひかり)と[illegible]山[illegible]浦と號[illegible]今[illegible]觀音堂あり[illegible]三津寺[illegible]名をとり[illegible]号(がう)とす[illegible]

あふことは[illegible]三津乃[illegible]

光俊

世の人の手向をも見てしかと玉垣の
三はの漆乃みのり雨のしろ　似春

阿弥陀が池

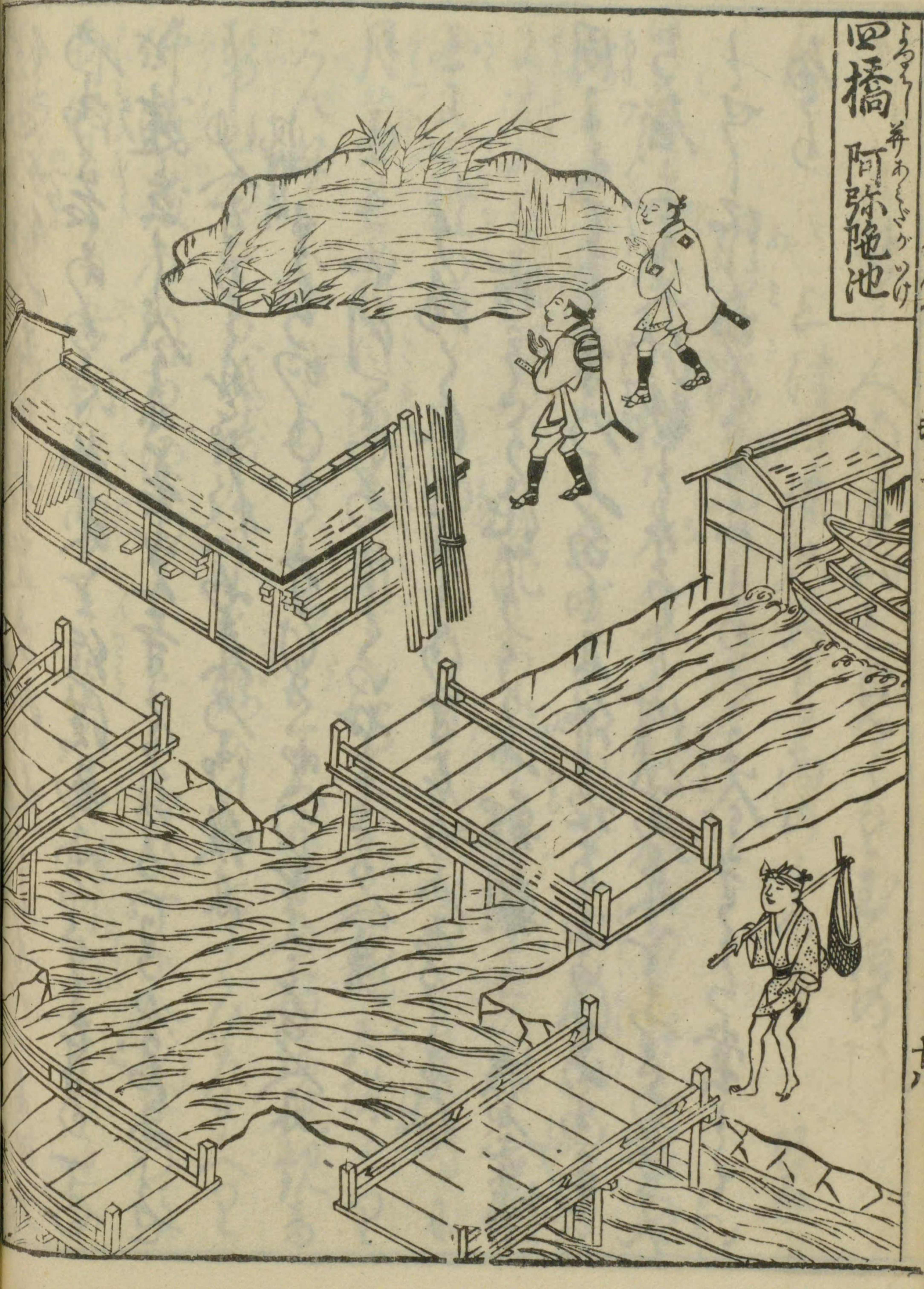
○三河乃国八橋ハ名にながれて今ハあしくもハ又橋といふあり是より三河むらあり蘭斎藏乃うまに池あり是をあミだの池といふむかし佛生世の時人国より国中のうちに疫病ありて万民をなやませけり時に月蓋長者目蓮尊者とともに龍宮城へえんぶだごんをとり来り一尺五寸の阿弥陀観勢至乃三尊を鋳させ給ひ其霊験乃病をのぞき給へり佛滅度乃後百済国よりわたり給ひ一千余歳乃後斉明天皇より百朝欽明天皇乃御時日本にわたらせ給ひ摂津国難波の堀江のほとりにしづめまゐらせけり（今此池の中也）其時信濃国の住人本田善光夫婦都よりかへるのみ如来乃御告ありて如来を信濃国へうつし奉り一宇を建立し今に善光寺と申なり此の名のこせしゆへ人かくいへりされバ如来の御歌に

風雅集
まちかねつよくなけくやつもりこな人に
いけとはいつくいはせのさう人まで
うきくさもをしはすをさふこゝろしは
かのこゝの池にすむ鯉鮒　藤原宗益

同寺乃ミなミに佛宮石といふありこの元ハ守屋太子へ法敵となりし時如来を此池にしづめ奉らんとせし所也されバ今にいけ宝堂とい
ふ由なり

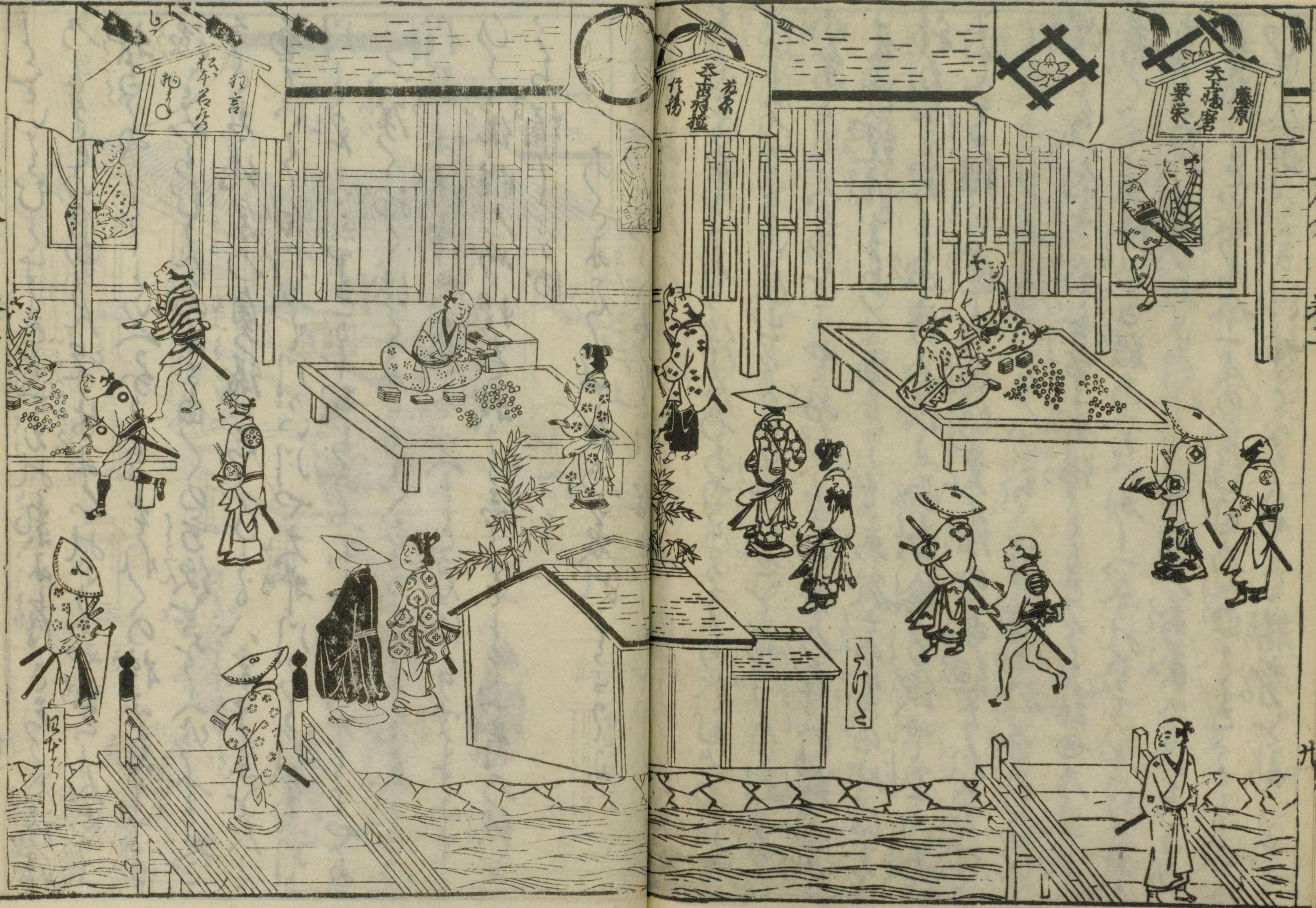
道頓堀

○おさまれる御代のひかりあまねきや天下泰平にして国富民さかへ里のわらべも万歳をとなふ歌舞妓芝居の太鼓の音は道頓堀江の魚をおどろかし三味線のひゞき川の流をとゞめ鼓の音は芝居の軒端にそゝき梁の塵もうごかしいつまでもたえずひゞきわたる隣家の貴賤目をよろこばしむ四條五條も此地の賑ひにはおよばじましてきゝてすゞしく日本橋のこなたへ老若男女袖をつらねひきもきらず錦のひとへかさねの女子の袖の色とりどりに其けしきはいふもさらなりいやゝとみむかしへ家々にまさりてよくまたおもしろきにさてそれとちぎりしこゝろかはらでとゞまりけるは何ともいへ。


四橋 并 阿弥陀池

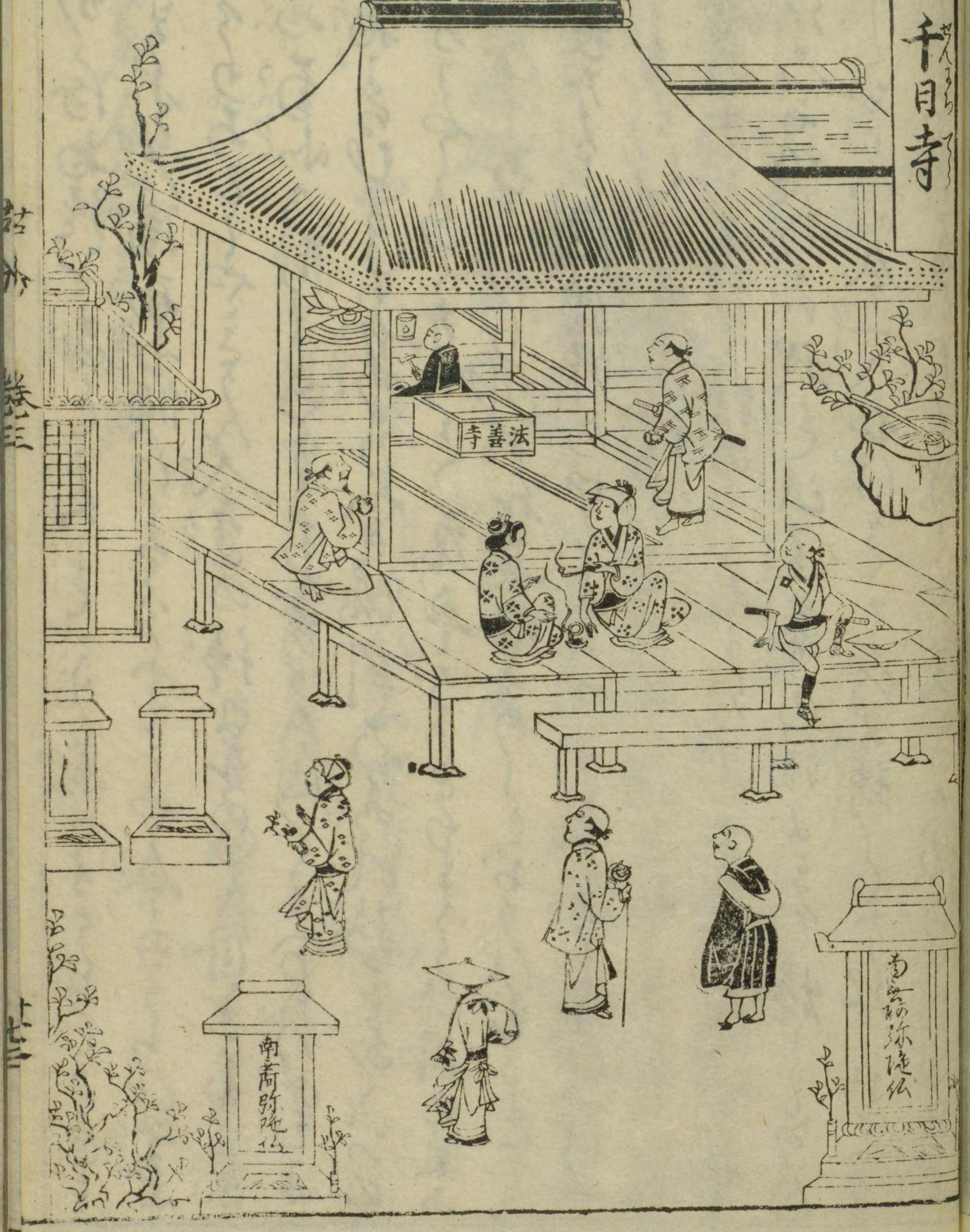
花く説経ものは。鉦あれど。孔雀鸚鵡よ。白鵠くの鳥。陵頻ハすぐつてじや。元通らふうし。虎乃つをとらわがかしくつき。時計乃車の廻道。石こらめぐつきあてぞあるへさしつきざおすきへ。仰しつきとおもそびさいふも、志ざしり信じ千日寺よ。参りまし足と休めてそこられ人乃宗家りしこゝみ。集りとものがさゆく枕わすまへぞき縁べありしむりしく寛永乃そとじめつりし式墨よりもうにあるづくが。覚寺乃安井のあるうし。平野巻といひし埒乃おいどり鎖まくおらとうこうしもてゆへぞのづりし所乃名をして道楽場といふ寄ら芝居役者のまるぞんし。ころ湯のあけうける場京のあふぬおくまでいひ逝かしじごまとおもそく多まいてむしこわしふあぬしいぱしいじぞしあめ世乃中

よまでておそびぬるわざなれしぱよきこ道ぞおりぱおもともおもひ事中まおつ俗衆乃おつまりうちに。むらるゝことざうしあなうかひ出るゝは。まん後世と称りんしれまぐ。小乗より大乗をこそ好むべし。三界乃導師釈迦如来の説法まちくなれども。去既真実の妙法神力を志めし出給ふ。像よ正出捨労役無常とのまそ。る祖目蓮尊者もいは妙業の再縁なれば。しとゐへど。又信なりし人の云へ八万諸聖教も一の陀と云向他念念仏ともいとが。超世乃悲善く。ことよめ仏。為数あり。ゐひあし。へ。今此事子とは末の云郷云労乃あれども世法。藩民乃湧ちらひの鄙しといへど。今一人の往生因乃宗すくまさるもといふむつ。念仏の無益わりといふんや。よ勝劣をむしもこ


藤原
天下播摩
要栄
天下
作揚
狂言
松本名左
日本ばし

ととゞいたるむくすまとし。宗れ氣に背さちつと讃法ろしろをいふなれ。況他宗にみれいうわや出くらん志らし秘密のこととし人のかたうれぞれしくの機に應して至縁とみちむらんの家々のさ母くの方便をもてへだつふと也。ごふるき他宗の奥義へ志らるとも。八宗十宗をたとへあてゝいはゞ。白川がも川。かい川や大井川。かつら川なすの川川と名ちる流もしおもむれた。淀川たいりすやなからへ廣く翔く。池くみごめあくみなりとも。元来ハ乃性は一味清浄也。角もいへども見ゆるすまのなかにをとひとく佛性乃妙理を我うし志るしをとて一首乃歌と。ゆら誦しける

あくみぬて一夜乃夢れこちよりてゝみ
ぜんくなりとれ浮世たるもと


千日寺
法善寺
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

かく仏抱経と云も笑しくて居るゝうちとうくせし
まふり夕陽西ふ傾けるをもふしるや命のうちは蒿ふ
それぞれとしやさうん人迄の積もあめく目をさめ東
西。南北のうちまさとどこちにあるさ海くうへかとお宮み
朝よのへむしうり集し人も漏剋のあれ跡つとあくいつも
つまりやうあくなりゆく。落魂をうしさつとちるひ。目の前ふ
さびしきよあらもしれど世のさめしも。おもひ出るまて。
哀なるも法師の口をそさひ々うすぶて我もひいはる
よりもれうう命の程ぐふのうちも。いさ知らず市れる
屋のまくまうし。独のこうねうれよの中。路よ浩へさ野
原の露いつの秋も此送葬の場よきそ懐もあらん
しとおりへは今一入心ほそくうし行く地ってなれうしおくう
死。夜のこうめもあり採くも。広さき大坂乃くう而き浮く
葬乃烟。こしやくすぎまことに歌もまく。古み葬ふも
おる。古墓い何の代乃人が姓も名もしるまぞ。
紀しくあしくなる。西施が趙飛燕いつくぞかあると哀。
誠ふ蓑乃浮世のあさし。夢と思しもしも。驕らず
うけるられ。人とう生まるまこと御法をうくる人も泣
よわるる。貪嗔癡乃さはふげて。六根乃罪よおち
も輪廻乃業よ。まとひやぬらん

やきはは原に何めは去せたる拍を
何か跡かく苦とは

うく庵主

菱宗画師

萬合船三巻終

162
86

162
2
86

京
國 圖
書
館 藏